19
2009.5

薬友会報

千葉大学薬友会

亥鼻校舎（医薬系総合研究棟）

共用試験CBTの受験風景

医・薬・看合同授業「チーム医療」において
患者体験記を聴く

薬友会長挨拶 …… 2
副学府長挨拶 …… 2
新任のご挨拶 …… 3
SPECT/CT装置を利用した学部内共同研究：SPECT/CT装置の紹介 …… 4
「世界規模の治験・臨床研究を担う医療人育成」プログラムに期待すること …… 5
研究室紹介 …… 6
恩師　鈴木和夫先生を偲んで …… 7
鎌滝哲也・北海道大学名誉教授（昭和40年本学卒）が
平成19年度 紫綬褒章を受章されました。 …… 7
クラス通信 …… 7
支部だより …… 13
ゐのはな山岳会 …… 13
亥鼻会 …… 13
サークル紹介 …… 14
学部だより …… 14
受賞等 …… 14
博士学位授与一覧 …… 15
教員の異動 …… 16
薬友会より …… 17
薬友会セミナー …… 18
編集後記 …… 18

千葉大学　薬学部・大学院医学薬学府 大学院薬学研究院

Chiba University

Faculty of Pharmaceutical Sciences
Graduate School of Pharmaceutical Sciences

薬友会長挨拶　石川　勉

薬友会員の皆様におかれましては、平素大変お世話になっており、誠にありがとうございます。薬友会長として２年目を迎えることになりました。本年もどうぞ叱咤激励の程よろしくお願い申し上げます。

平成18年度に導入された薬学新教育制度の改革の一つは、事前実務実習（学内）と現場での実務実習（病院と薬局）です。千葉大の場合、病院実習は附属病院で行われますが、薬学研究院に所属する２名の教員を薬剤部に配置して対応します。また、実務家教員として既におられる佐藤信範教授に加え、この４月から新たに関根祐子先生を東京大学附属病院から教授として迎え、薬学６年制教育を主体的に担当して頂くことになりました。このために既存研究室の再編という大きな痛みを伴いましたが、大学本部や研究院の先生方のご理解とご協力により、その準備は概ね順調に推移していると言えます。大学院教育につきましては、大学院教育支援改革プログラムで採択されました「世界規模の治験・臨床研究を担う医療人育成」の特任教授として、元厚労省審議官黒川達夫先生を昨年10月からお迎えすることが出来ました。今年度が最終年度に当たりますが、より充実しさらなる飛躍を大いに期待しているところです。

昨年、研究概算として採択されました「For SPECT 新規標識プローブの開発による医薬イノベーションの創出」は、幸いにも引続き予算配分されることが決まりした。このことは経済的に一安心ですが、今年度には成果が求められ、正念場となりますので、研究院ではさらに一丸となって取組み、実績を出す所存です。

昨年世界を襲った未曾有の経済危機は、様々な影響を及ぼしており、受験も例外ではありません。今年度の首都圏大学への入学志願者は、軒並み落ち込んでおります。千葉大学薬学部も前期･後期ともに100名ほど減少しました。それでも、前期（60名定員）が452名（7.5倍）、後期（10名定員）が249名（24.9倍）と、極めて多く受験生が志願し、その倍率は全国でも突出しております。それだけ期待感が大きいということですので、社会に対する責任として、我々教員は教育と研究に一層努力していきたいと考えております。

ところで、千葉大学薬学部は2010年に創立120周年を迎えます。その記念事業を早急に考える必要があると思っております。その節には皆様、どうぞ積極的なご協力をよろしくお願い申し上げます。

副学府長挨拶　堀江　利治

平成21年４月より、大学院医学薬学府の副学府長を務めることになりました。主として薬学系を担当することになります。平成13年に医学・薬学融合型大学院である本学府が設立され、今年で９年目を迎えます。この間、教育・研究に、医学と薬学が融合したことによる効果は現われてきています。魅力ある大学院教育「イニシアティブ」事業（文部科学省）として、「情報集積型医療創薬を担う若手研究者の育成」プログラム（平成17－18年度）、大学院教育改革支援プログラム事業（文部科学省）として、「世界規模の治験・臨床研究を担う医療人育成」プログラム（平成19－21年度）が採択、実施されています。この大学院GPをみても一歩一歩着実に、そして発展的に成果を生み出してきていると思います。このプログラムで前厚生労働省審議官黒川達夫先生を特任教授にお迎えし、講義、演習、海外研修など内容的にも一層充実したプログラムが展開されています。

平成18年度から始まった薬学教育改革で、学部の教育体制の整備が進められ、今年は初年度入学した学生が早くも４年生となりました。薬学科（６年制課程）では５年次での病院・薬局実務実習を前にして、事前実務実習、共用試験が実施される重要な年度でもあります。一方、薬科学科（４年制課程）については、大学院修士課程に進学する前年となりました。本学部の伝統とさらに医療を支える高度な医療人を育成すること、及び広い視野と深い学識を有する研究者を養成することを目的とする本学府修士課程には、社会からの期待も大きく、これまでも非常に多くの修士課程志願者がありましたが、薬学教育改革によって状況が大きく変わったことなどを考慮して、修士課程の専攻、定員数などについて、これまでの修士課程の改革が必要となり、大学院改組が進められています。創薬・生命科学の研究者養成等を目指す４年制課程の上に連接する修士課程の改組にあたって、これまでに築かれてきた本学の伝統を大切にし、社会の期待に応えられる大学院システムを構築し、優れた人材を育成していきたいと薬学研究院一同考えております。今後ともご支援・ご協力の程よろしくお願い申し上げます。

新任のご挨拶　　黒川　達夫

大学院薬学研究院GP講座の特任教授として昨年10月赴任致しました。当講座は国際共同治験を担う医療人の育成をテーマとしています。大学院教育の場では、これまであまり取り組まれていなかった領域とのことで、一から勉強し直しの覚悟で臨んでいます。

私自身は、73年に千葉大学薬学部を卒業し、その後行政の場で35年以上を過ごし、少々畑の違う人間です。しかし当講座が関連するテーマについては、濃淡や立場はともかく、常に業務として携わっていることの多い職場でした。たとえば90年代以降急速に進んだ医薬品国際化の中心であるICH（日米EU医薬品規制国際ハーモナイゼーション会議）に、計画段階から日本政府の当事者として参画させて戴くなど、貴重な経験をさせて戴きました。また治験に関しては、第１次GCPの制定から各種臨床試験ガイドラインの作成、21世紀に入ってからは薬学教育６年制の導入、一般用医薬品の販売制度改正などに関わり、さらに新薬承認審査体制の強化や安全対策を経験するなど、今回のGP講座のテーマの周辺で勉強して参りました。

さて、私が久しぶりに大学に戻り、大きく変わったな、と思うところがあります。外から見ている限りになりますが、大学での研究目的はかつては「科学的な真理の追求」であり、医薬品の創製（シーズ獲得から承認を得て使われるまで）はいわばその真理探究課程からのスピンアウトであった観がありました。しかし現在ではすっかり様子が変わりました。大学の研究や学問は、社会や国民が直面する様々な困難や問題に対し、ともに解決策を考えていく場として大きく期待されているようです。これは適用される評価尺度や財政的な運営原理、また何よりも社会の見る目や声からも自明です。当講座は主に後者を担う部分と考えます。テーマである治験促進のための人材育成を中心に、医療の第一線における有効性の評価や安全な使用の実現、産業としての振興など、これまであまり体系化されていなかった事象を扱い、日々の精進の中から学問や科学として評価法や到達目標などを明らかにしたく努力する所存ですので、今後ともよろしくご指導のほど、お願い申しあげます。

日本薬剤疫学会理事、日本医薬品情報学会幹事、仏国立薬学アカデミー外国会員、国際医薬品情報学会（DIA）日本委員会議長（予定）

新任のご挨拶　　関根　祐子

平成21年４月より実務薬学研究室を担当させていただくことになりました。歴史ある千葉大学薬学部で後輩の指導に当たることができる喜びと共に責任の重さを感じ、身の引き締まる思いです。薬友会報の紙面をお借りいたしまして、皆様にご挨拶申し上げます。

私が千葉大学薬学部で学んだ頃の薬学部の使命は、優秀な薬学研究者を作ることでした。今から約30年前の入学式は「ここは薬剤師を作るところではありません」という衝撃の学部長先生の挨拶で始まりました。それから四半世紀を経て、医療の多様化に伴う薬剤師の役割の多様化の結果、より高度な知識や技能を持った薬剤師が必要とされるようになり、薬学部も４年間の教育では臨床現場のニーズに追いつかず、６年制になりました。国立大学薬学部の役割も優秀な薬学研究者を作ることの他に優秀な薬剤師を作ることが期待される時代になり、千葉大学でも薬学部のコースは薬剤師教育を主とした６年制と従来の基礎研究を主とした４年制＋２年のコースに分かれました。しかし、２つのコースに分かれたといってもまったく別の教育を受けるわけではありません。薬剤師教育の根幹には基礎薬学の知識が必須です。臨床現場で諸々の化学、製剤、薬物動態などの知識を持った職種が薬剤師以外にいるでしょうか？　基礎薬学は臨床での数多くの問題を探索し解決するために必須の知識です。また、臨床現場では基礎研究の経験は必要ないと思われがちですが、基礎研究を行うことで論理的思考が養われることは自明の理です。６年制の学生にとっては大学時代しか基礎研究を行う機会はありません。千葉大学薬学部は６年制コースと４年制コースが独立せず、６年制の学生でも基礎の研究室に在籍することが可能です。このような恵まれた教育環境で基礎薬学の知識を磨き、薬剤師として臨床で活躍するための教育の一端を担うのが実務薬学研究室です。

私は大学を卒業後、一貫して病院や調剤薬局で薬剤師として勤務して参りました。これまでの経験を活かし、新時代の薬剤師に必要な知識、技能、そして医療人の心を加えた教育を行い、他大学とは一味違う薬剤師を育てることが私に与えられた使命であると思っております。

国立大学薬学部の意義は、即戦力の薬剤師を養成することではなく、10年後、20年後に地域の、ひいては日本の薬剤師の中心となれる人材を養成することです。基礎薬学の知識の上に築かれた臨床薬学の知識や技能に加え、基礎研究の論理的思考を兼ね備えた人材を育ててゆきたいと思っております。今後も、薬友会の皆様のご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

特集　SPECT/CT装置を利用した学部内共同研究：SPECT/CT装置の紹介

昨年の薬友会誌では、概算要求特別教育研究経費として薬学研究院から５年計画で提案した「For SPECT新規標識プローブの開発による医薬イノベーションの創出」が採択され、薬学研究院内での共同研究が始まることをお知らせしました。現在、それぞれの研究室が、①早期診断・治療効果判定プローブ開発、②プローブ開発のための基盤技術開発・アイソトープ治療薬剤開発、③標的分子の探索のいずれかのグループに所属して研究を進めています。

分子イメージングでは、生きている動物の標的分子を高い精度で描出することが要求されます。そのためには、標的分子に選択的に集積する標識プローブが不可欠であり、薬学研究院の研究室が協力してこの開発に取り組んでいますが、それと共にSPECT装置の分解能と感度も重要です。本稿では、昨年８月末に西千葉のアイソトープ実験施設に設置されました米国Gamma Medica-Ideas（GM-I）社のSPECT/CT装置を紹介します。

図１左は本装置の全体像、右は内部検出部です。本装置は、動物用ベッドの周辺を４つの検出器で取り囲み、動物に投与した放射性薬剤の集積部位を効率良く検出するGM-I社の最新モデルです（世界で初めて設置されました）。検出感度を向上するため、各カメラは任意の距離まで動物に近づけられます。また、γ線の検出にエネルギー分解能の優れた半導体検出器を用いているので、エネルギーの異なる二種類の放射性核種で標識した化合物を同時に投与しても、二種類の放射線を選別し、それぞれの化合物に由来する画像が得られます。

図２は、アクリル製の円盤に内径の異なる複数の円柱状の細孔を空け、これに放射性の試料を注入して本装置で撮像した結果です。右上が内径２㎜で、反時計回りに１㎜，0.8㎜，0.5㎜ですが、0.5㎜の孔まで明確に描出されました。図３は、リンパ節に常在するマクロファージの受容体と強く結合するマンノース修飾デキストラン誘導体をテクネチウム-99mで標識して、マウス足裏から皮下投与したときの画像で、左がSPECT、右がＸ線CT、中央がその融合画像です。SPECTでは投与部位（左端）の他に３つのスポットが検出されました。これだけでは、それぞれのスポットの集積部位が分かりませんが、SPECT画像にＸ線画像の形態情報を加えることで、それぞれのスポットがマウスのリンパ節であることが分かります。マウスのリンパ節は１㎜よりも遙かに小さく、投与する薬剤が選択的に標的分子に結合すれば、この程度の大きさの組織でも十分に描出可能であることが確認されました。なお、この画像では３つのリンパ節が描画されましたが、これは、投与した薬剤量が多いために足裏に最も近い膝下リンパ節のマクロファージの受容体が飽和されて次の股関節近傍のリンパ節、さらに下腰リンパ節へと過剰の薬剤がリンパ流に乗って移動したためです。

今回はSPECT/CT装置を紹介しましたが、今後、薬学研究院の共同研究に本装置を活用して疾患の診断から創薬に至る「医薬イノベーションの創製」を促進したいと考えています。また、民間企業を含めた様々な研究施設との共同研究も推進したく考えています。本研究にご興味をお持ちの薬友会員の皆さまからのご連絡をお待ちいたします。

（荒野　　泰）

図１

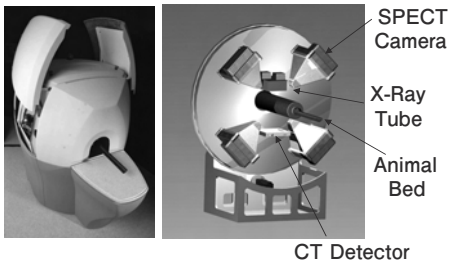


図２

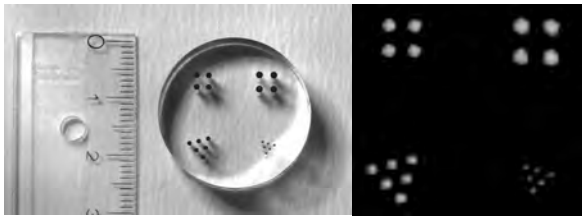


図３

SPECT　　Fusion（SPECT+CT）　　CT

寄稿　「世界規模の治験・臨床研究を担う医療人育成」プログラムに期待すること

平成19年度より大学院教育改革支援プログラム「世界規模の治験・臨床研究を担う医療人育成」が開始されたとのこと、いまや大学に居ながらにしてこのようなプログラムが用意され学べるのかと思うと、大学教育の場が益々進化していることを卒業生として大変嬉しく思います。

さて、私は製薬業界に勤務して10余年、この業界では本学の多くの諸先輩方が様々な分野でご活躍されており、そういった方々と接する機会がある度に会社の枠を越え励まされております。今回、私が携わっている医薬品の承認申請業務をはじめ薬事法に纏わる所謂薬事業務経験を通じて「医薬品の開発とは実際にどのような仕事をするところなのか」について、浅薄な経験からながら私個人が日々感じていること、また考えていること、そして将来への期待についてご紹介させていただきます。

私が薬事業務に携わるようになって未だ10年にもなりませんが、まさしくこの10年は変化の速い時代だったといえるのではないでしょうか。国際整合性を踏まえた製造承認制度の見直しに基づく平成17年度薬事法改正をはじめ、ほんの５年前の事が昔話になる程の日進月歩。個人的に一番大きく変化したと感じるのは、海外で実施された試験データの利用ではないかと思います。

15年も前は、各地域の規制要件を満たすべく、海外は海外で、日本は日本で、時間とコストのかかる重複した臨床試験を数多く行っていたのが通常でした。平成２年４月のICH発足以来、各地域の医薬品承認審査の基準の合理化･標準化がなされ、当ICHより外国臨床データを受け入れる際に考慮すべき民族的要因についての指針が示されたのは平成10年、約10年前のことです。以来、ブリッジング試験*をはじめ企業は挙って如何にして海外臨床データを利用し医薬品の開発期間を短縮できるかに知恵を絞りました。しかし、これでは利用する海外データが得られるまで日本は待たなければいけない、つまり世界に先駆けて日本発の医薬品という夢は難しくなります。いまやその進化型、国際共同治験で世界同時開発・同時審査・同時承認を目指すという考え方へ変わりつつあり、私が薬事業務に携わり出した頃に夢物語だったことが今現実となろうとしています。

しかし、「言うは易く行うは難し」とはまさにこのこと、最近私が経験した本邦での承認申請に海外臨床データを利用したことを少しお話ししたいと思います。海外臨床データの利用とは一口にいうものの、実際には幾つもの分厚い試験報告書や膨大なデータを前に、どの臨床データを如何に利用し、そのデータが本当に日本の申請での利用に足るものか、各々の試験報告書を読込むだけでなく、そのデータの信頼性等をも勘案しつつ承認申請のストーリーを一つ一つ地道に構築していくのが実際です。「海外臨床データの利用」と夢のある言葉の裏では、研究者から臨床開発担当者まで当事者は昼夜を忘れて議論を繰返しながら必死で互いに知恵を絞りあいます。CMC**・薬理・ADME・毒性・臨床等各専門部署が持ち寄ったデータを基にその薬剤の特徴を踏まえ、第三者（審査当局）が評価出来るよう申請資料を並び替え、審査官へ直接伝える通訳の様な役割をするのが私の仕事です。新薬の誕生はまさに生みの苦しみ、所謂どこの本や資料にでも記載されている申請から承認までの流れに沿い、各stepで必要とされる書類を提出さえすれば承認されるというものではありません。字面には決して表れない、審査当局との幾度にも亘る照会・回答のやりとり、互いに納得がいくまで何度でも行われる審査当局と企業のディスカッション。それが数か月から時には数年にも亘って行われます。互いに議論が出尽くすまでやりとりをするわけですから、承認までの最終段階ともなれば、感慨も一入です。「最終stepにコマを進めましょう、長い道のりでしたね」と審査官から連絡を受ければ、どんな薬事担当者でも満面の笑みで「有難うございます！」と応じているのではないでしょうか。企業にとっては薬の種探しから始まっている、とてつもなく長い道のりを思えば、この喜びは何度味わってもいいものです。また、以前はofficialに出来なかった開発途中での相談が、今日現在では有料で相談でき助言を得られる環境も整っています。企業は自分達の開発品を何とか上市したいという思いが先行するあまりどうしても長所にばかり目がいきがちですが、このような機会を利用することで審査当局の冷静な視点や考え方を開発途中で聞くことが出来ます。企業の薬事担当者は審査官と審査過程で直接話す機会に恵まれますが、その際に感じるのは世界に先駆けて日本発の医薬品を世に送り出したいという熱い思いをもつ方が多いということ。新しい薬を一日も早く世に出したいという思いは企業も審査当局も同じです。しかし、一方では、どんなにその思いが強かろうと科学的根拠が乏しければ承認不可という厳しい現実をつきつけられることも事実です。

最後になりますが、「世界規模の治験・臨床研究を担う医療人育成」プログラムから近い将来グローバルな視点で世界規模の医薬品開発に積極的に参画する人材が多く輩出されますことを願っております。

*　外国臨床データを新地域に外挿するために新地域で実施される補完的な試験。新地域における有効性、安全性及び用法・用量に関する臨床データ又は薬力学的データを得るために実施される。このような試験が薬物動態に関する付加的な情報を含むことがある。（平成10年８月11日付医薬審第672号通知より）

** chemistry, manufacturing and control

（平成８年卒　アスビオファーマ株式会社　原田　未央）

研　究　室　紹　介

生物薬剤学

生物薬剤学研究室は、平成６年１月より堀江利治教授が着任し、薬物の安全で有効な利用を目指した体内動態に関する研究を行っています。現在の研究室は、平成17年より着任した設楽悦久准教授と関根秀一助教を合わせた３名のスタッフおよび博士課程４名（D4：１名、D3：３名)、修士課程12名（M2：６名、M1：６名)、学部学生５名（薬学科：２名、薬科学科：３名）の学生から構成されております。今年度の４年生からは、医薬品の研究・開発を目指す４年制課程の薬科学科と、薬剤師として臨床現場で活躍することを目指す６年制課程の薬学科に分かれており、私たちの研究室は両学科の学生を受け入れることとなりました。６年制課程の学生を受け入れる初年度であり、戸惑うことも多いのですが、研究室での生活を通して問題解決能力を持つ優れた薬剤師を生み出すことにも貢献したいと思っています。

高い安全性と有効性を持ち合わせた医薬品を創製するためには、化合物自体の薬効あるいは安全性の高さを追求するだけでは十分とは言えません。薬効標的への指向性を有し、毒性標的を回避するような優れた体内動態特性を持ち合わせていることもまた考慮する必要があります。この体内動態特性は、個人間で異なることが知られており、同一の個人内においても何らかの病態時や併用している薬物によって変化することがあります。したがって、優れた医薬品を創製し、それらを適切に利用するためには、薬の体内動態特性を十分に知り尽くす必要があります。そこで当研究室では、(1)酸化ストレス時などにおける薬物トランスポーターの機能変化、(2)トランスポーターが関与する薬物間相互作用、(3)酸化ストレスによる消化管吸収の低下および(4)薬物によるミトコンドリア障害を司る体内動態関連因子に関する研究を軸としています。これらを通して、優れた医薬品開発および医薬品の適切な使用法の確立に寄与すると同時に、高い考察力と幅広い知識を持った優れた学生を育てていくことを目標としています。

（設楽　悦久）

薬化学

薬化学研究室は、1995年に新設の有機合成系研究室として発足して以来、今年で15年目を迎えました。2009年度は濱田康正（教授)、根本哲宏（助教）のもと、Sylvain Lectard博士研究員、大学院生17名（博士課程５名、修士課程12名)、学部４年生４名、研究生１名のメンバーでスタートしました。また、研究室発足以来、これまでに研究室の発展に尽力された原脩先生、牧野一石先生は、それぞれ名城大学薬学部、北里大学薬学部の教授として研究室を主宰しており、濱田研究室の裾野の広がりを感じ始めた今日この頃です。

当研究室の研究内容は「触媒反応に立脚した有機合成化学」と一言でまとめることができます。取り扱う触媒は大きく２種に大別でき、(1) Pd（パラジウム）Ni（ニッケル）Ru（ルテニウム)、Ir（イリジウム）といった金属類と、リン化合物で構成される不斉配位子を組み合わせた、不斉遷移金属錯体を用いる触媒反応 (2)巨大な生体酵素の持つ機能を低分子に再現したキラル有機触媒を用いる反応があげられます。更に、これら独自の触媒反応を駆使する生物活性天然物の全合成研究も精力的に展開しており、強力な抗HIV活性を有する海洋性ペプチド：パプアミド類を初めとして、ハリペプチン類（抗炎症作用)、タングトリン（抗ガン活性）など、様々な天然物の全合成研究に取り組んでいます。研究テーマは学年に関係なく高難度に設定するため“立ち向かっては跳ね返され”を繰り返す毎日ですが、それでこそ研究！とばかりに、皆それぞれ悠々自適にこの生活を楽しんでいるようです。

触媒反応は、反応基質の３次元的な相互作用様式から至適構造を予測する論理的な側面と、理想的な触媒空間を頭の中にデザインし、化学合成によりイメージを形にするアートな側面の融合により生み出されます。この知的ゲーム、ハマったら病み付きです。

（根本　哲宏）

恩師　鈴木和夫先生を偲んで

千葉大学名誉教授　鈴木和夫先生が平成20年７月15日、突然のご病気により、ご逝去されました。お亡くなりになられる10日ほど前に東京で行われました学会で、闊達なご様子で討論に参加されており、また平成20年３月の定年退職時よりも、体調もよろしくお見受けしましたので、年会に参加した卒業生達と慶び合っていた矢先の出来事でした。深い悲しみと同時に、先生のご研究や学会活動における存在感の大きさが故の虚無感から、未だに脱し得ておりません。鈴木和夫先生と、学生として４年３ヶ月、職員として11年３ヶ月を共に歩んできた思い出を綴らせていただきます。

鈴木和夫先生は、平成４年１月１日に国立環境研究所より、故山根靖弘千葉大学名誉教授のご後任として、千葉大学薬学部衛生化学研究室に赴任されました。「論文をバリバリ執筆される教授がやって来る。」ということが赴任前から噂になっておりました。赴任後は、まさに噂にたがわず自ら研究の先頭にお立ちになり、大学院生・学部学生を牽引されました。実験終了後に、高級洋酒をお持ちになり、学生との議論を楽しんでおられました。その中で絶えず先生は、学生達に「研究成果は世界に発信しなければ意味が無い。研究者の仕事は、英文の原著を書いて終わりとなる。大学院生は、もう立派な共同研究者であるから、君たちもそのことを理解して、研究に取り組みなさい。」と言われておりました。先生は、私一人にそう言われたわけではないのですが、私自身はすっかり「先生の共同研究者」という言葉に酔いしれ、大学院の博士後期課程への進学を決めました。私に限らず、多くの学生が先生をお慕いし、衛生化学研究室の博士後期課程進学率は当時の千葉大学薬学部の中でもトップクラスでした。また多くの方がご存知のように、先生は世界の研究者と幅広い交流を持っておりました。このことも先生の教育方針に大きく反映しており、多くの大学院生は在学中に国際学会で発表する機会を与えられました。また衛生化学研究室の代名詞ともなりました海外への研究室旅行も、鈴木和夫先生自らがご発案され、実行されました（ハワイ、韓国、タイ、グァムなど）。このような研究・教育方針をお持ちの先生の下に、多くの学生が集まり、ご在任中に16名の博士号取得者（論博含む）及び54名の修士号取得者を輩出されました。

鈴木和夫先生は、どんな小さなことに対しても全力を尽くすということをモットーにされており、膨大な仕事量にもかかわらず、平然と実行される行動力が多くの人を惹きつけたのだと思います。このことをいつも身近で見ていた弟子の一人として先生を誇りに思い、また同じ道を行く後輩研究者として羨望の眼差しで見ておりました。

昨年７月の東京での学会から千葉へ帰る道すがら、先生と二人きりで、いろいろなお話をさせていただく時間を持てました。残念ながら、これが先生とお話した最期の機会となってしまいました。教授と准教授という立場を離れ、これからもっといろいろなことをご教示していただこうと思っていた矢先のことで、痛恨の極みです。鈴木先生は研究者として輝かしいご業績を残されました。加えて、教育者としてのご業績は、先生に薫陶を受けた我々弟子たちが自らの将来をもって証明しなくてはなりません。先生のご恩に報いるよう精励して参ります。どうかいつまでも天国から我々を見守っていて下さい。心より鈴木和夫先生のご冥福をお祈り申し上げます。

（Biomed. Res. Trace Elements, Vol. 19, 278, 2008より転載許可を受けて一部改変）

（昭和薬科大学薬学部衛生化学研究室　教授　小椋　康光）

鎌滝哲也・北海道大学名誉教授（昭和40年本学卒）が平成19年度 紫綬褒章を受章されました。

鎌滝先生は、昭和42年に修士課程を修了された後、千葉大学副手として薬学部（薬物学）に残られ、教務職員、助手を経て、昭和52年には慶応義塾大学医学部講師となられ、その後助教授を経て、昭和60年より北海道大学薬学部教授としてご活躍でした。

この度の受章は、薬物代謝学の分野において、種々の薬物酸化酵素チトクロームP450分子種の精製純化を行い、それら酵素の薬理学的・毒性学的な役割を明らかにするとともに、薬剤応答性の個人差を遺伝子レベルで検討し、個別化医療の実現に向けた基盤研究で優れた業績を上げられたことが認められた結果です。先生は、総論文の被引用回数が11,000回以上にもなる被引用回数の高い著者（全体の0.5%以下）として国際的にも認められています。先生は、日本薬学会奨励賞・学会賞、宮田専治学術賞、日本環境変異原学会奨励賞・学会賞、第１回日本毒科学会田邊賞、日本薬物動態学会学会賞、ISSX Scientific Achievement Award 2003 Asian Pacific Region、高松宮癌研究基金学術賞等の数々の受賞に続き、今回の紫綬褒章の受章となりました。

ところで、芸術文化、スポーツ、学術分野において活躍した人を対象にした紫綬褒章は25人に贈られました。偶然ですが、スポーツ振興・芸術文化関連では鎌滝先生の研究・健康を支えてきた？「ゴルフ」や「歌」の関係で樋口久子さん、五木ひろしさんが受章されております。最近では、「人体実験ノススメ －糖尿病予備軍へのメッセージ－」を出版されて新たな領域への挑戦？も始められました。

後輩・弟子の一人として、鎌滝先生の益々のご活躍とご健勝を祈念しつつ、ご紹介致しました。　（北田　光一）

Letters from Alumni

クラス通信

昭和15年卒業（二六会）

モチノキ科のタラヨウ「多羅葉：牧野植物図鑑」の木を植えている郵便局を見受ける。その葉の裏に爪楊子などで字を書き、紀元前に利用された。現在でも定形外で投函できる。これこそ「葉書き」である。郵政関係の薬友の方々には、先刻ご存じと思う。しかしタラヨウの名称の元がバイタラ「ヤシ科の貝多羅」に由来することは、あまり知られていない。インドの佛教経典は初期にこの聖木を用いた。シュロの葉に似ているその葉を干して幅６㎝、長さ30～60㎝に切って使う。八千頌般若経（ハッセンジュ　ハンニァキョウ）を書いた葉片の化石が見つかっている「佛教大辞典」。

温泉旅行で「葉書き」に興じた級友は、みな鬼籍に入ってしまった。　（石丸　正美）

昭.16.３月卒（一葉会）

「家宝となった　一冊の本について」

千葉大学大学院医学部教授医博森　千里先生（陸軍軍医総監　文博森　鷗外先生の曾孫）が初めて出版された「未来世代のために」というエッセイ書にご署名されてご恵与下さった本のことで、過日、幕張プリンスホテルに於ける千葉大学九学部有志の懇親会に於いて偶然未知であった医博戸高先生（出版協力者）に出

会いケミレスタウン．プロジェクト未来世代のための街つくりなる新研究を知ると共に、特に終戦間際に私が陸軍ペニシリン研究員を拝命し朝鮮に於いて工業化に着手した経緯や当時の事情について、先日口演することになった際には柏の大学院教室－日立間を先生が運転され、お二人で往復頂き非情に恐縮。私は昭和16年秋、国立公衆衛生院薬学部学生のとき陸軍省薬剤将校試験に合格。20年６月薬剤大尉、正７位、ペニシリン研究員拝命。さもなくば、水戸聯隊兵卒、後年ペリリュウ島で玉砕の運命でした。　（海老澤賢一郎）

昭和20年卒業（るつぼ会）

るつぼ会同級生は平成20年９月で卒業63年になって、全員既に傘寿を過ぎた。一昨年平成19年は残念ながら金子、玉木、伊藤、藤井君４名の訃報が伝えられ、その結果名簿から物故者32名、消息不明４名、確認22名となっている。

平成20年のるつぼ会は６月7日前年と同じ上野池之端水月ホテル鴎外荘で開かれ、青森から坂本、細川君、群馬から飯塚（俊）君を加えて10名の出席者があった。話題はいつもながら自他会員の近況報告から学窓時代の懐旧談に花が咲いたが、出欠席の如何にかかわらずほとんど全員がなんらかの健康上の故障を持っていることが判った。それでも幸いに平成20年は今のところ訃報が伝えられた者がいない。

そこで今年は不況とは云え、世界に変革の気運が見えはじめたようで、我々も健康を保持しながら元気を出して新しい時代を見つめ直す努力をしたいと思う。

今年のるつぼ会も同じ場所を予定しているので、更に多数の出席者を期待している。写真は前列左から渡辺、西川、飯塚（敏）、坂本、佐川、後列横田、水橋、岡部、細川、中川の諸兄。　（西川　文雄）

昭和22年卒業（臥豚会）

昨年２月に山中孝君、３月に佐野怜君の訃報、また林弘君が平成19年12月末に他界され、心からご冥福お祈り致します。

私達の同級生は「会員名簿平成19年度版」に記載通り55名、物故会員は27名でした。これに３名を加えると、物故者は30名となります。また、従来より今井淳君、後藤健君、小峰喜佐夫君、松田精作君、呉恩巴雅弥の５名が消息不明です。

昨年12月、物故者と消息不明者を除く現存者20名につき、健康状況のアンケート調査を行い、全員から折り返し回答を得ました。その結果は次の通りです。

１．入院中及び介護施設等に入所中　３名
２．定期的に通院中でかつリハビリ又は介護を受けている。　２名
３．定期的に通院中であるが、概ね日常生活は普通である。　11名
４．元気で全く医療を受けていない。　４名

以上の私達の健康状況等を考慮し、有志により新宿の“三太”にて懇談を考えていますので、塩崎または中島に御連絡下さい。　（中島　良郎）

昭和23年３月卒業

卒後60年の記念クラス会はアンケートの結果、外房線上総一宮の東京薬業年金基金保養所の『くじゅうくり』で20．５．14に開催。体調不良や遠路の為の欠席も有ったが、好天に恵まれ更に地元の秦和儀君の初参加（卒業後）も含め11名が出席。丹前に着替えゆっくり湯に浸かり、外房の新鮮な魚介類の舟盛りや料理の数々を満喫しながらの歓談は、日帰りとは又異なる充実した楽しい一夜であった。翌日の観光は多忙な方を除き、６名が安房小湊にある日蓮上人の「誕生寺」と「鯛の浦」を見学後、ゆっくり昼食を取り夫々内房周り、外房周りに別れ現地で解散。楽しい一泊二日のクラス会であった。次回は東京で開催の予定。『訃報』クラス会の常連であった元共立薬科大学学長の友田正司君が20．５．29逝去。又元麻薬Ｇメンとして活躍した渡部吉郎君が旧臘に逝去。『合掌』齢八十ともなれば致し方ない事でもあるが、友が減るのは大変淋しい事である。

『出席者氏名』前列左より井上（富）、小林（剛）、青柳（高）、古川、古橋、後列左より皆川、三浦、豊田、小沢、大塚、秦　（三浦　清）

臥豚に想う　昭和25年卒

今年に入って、従業員の解雇が相継ぎ、お気の毒にも多数の人々が、路頭に迷っている。

思えば、戦後間もない頃に入学した我々はその背景こそ異なるが、同様の苦しみを味わった。千葉市は、ひどい空襲にあったので、住むに家なく、食も儘ならず、入学許可証は頂いたものの困り果てた。連日、下宿探しに没頭した。そして、全く当てもなく半ば断念した頃、最後に、探し当てたのが臥豚である。実験室の陰に荒廃と化した物置き小屋。よもやここに住めるとは想像もしなかったが、割れたガラス戸から中を窺うと、人の住んでいる気配がある。抜け落ちた床板に破れた畳が雑然と置かれてある。正に乞食小屋である。但どうやら雨露は凌げそうだ、贅沢は云えない。意を決して、先住の先輩に懇願の上、狭いスペースを何とか融通して頂き、強引に割り込ませて頂いた。嬉しかった。３年間、想像を絶する生活をして卒業した。

改めて、先輩に深謝。

時代と条件は異なるが、解雇された人々の寄る所のない切実な気持ちはよく解る。

但、窮すれば通ず、やがて道は開ける。頑張れと慰めてやりたい。　（宮坂　芳樹）

前回の同期会出席者
後列左から
勝又　敏雄、石井　隆人、宮原　源三、松本　　宏、鈴木昭治郎、田中　照夫
前列左から
角屋　　勇、小森　　正、宮坂　芳樹、飯島　昭治

昭和28年卒業（千葉薬28会）

平成20年の同期会は４月17日（木）、新井、飯田、大島、尾中、大野、笠原、加藤、亀田、北野、坂口、進藤、鈴木豊、高橋明、塚田、林の諸兄に桑原兄もカナダから帰郷16名の参加を得て盛会裡に３時間を超える時を過ごす事が出来ました。その折今年が卒後55年になる事から、笠原くんから紫陽花観光を兼ね、水戸の「ぴんぴんころり地蔵」参りの提案があり（彼が建立委員長の由）、５年前の卒後50周年記念にはこれが最後の機会かと一泊旅行と写真文集を出版したのですが、老いて益々盛んな事は何よりと、亀田、笠原両君の企画で６月19日参加者11名にて水戸講道館拝観と保和院「あじさい見物」と「ぴんころ地蔵」に参詣、市内料亭にて懇親会を行い帰京解散しました。

最近は諸兄時間に余裕が出来、絵や楽器を習うメンバーの展覧会や発表会に誘い合って観賞し、或は史跡見学（佐倉・順天堂発祥跡や航空博物館）等を行い、帰りに一杯と云う小グループの楽しみも行う様になりました。

尚同期会の直前３月３日に金子忠雄君が逝去され、会に先立って御冥福を念んじました（合掌）。

（尾中喜代治）

昭和29年卒業

平成20年10月24日、昨年と同じ東京・丸の内ビルディング36階「福臨門酒家」で皇居を望みながらクラス会を開催しました。

出席者は、写真前列左から今野一郎、早川元雅、山脇豊、山脇道子、比留間知子、後列左から比留間和夫、横井時燁、那須嘉資雄、吉積基之、光岡弘久、の10名。１年ぶりの再会にそれぞれ旧交を温め、近況を話し合いました。

闘病中の伊藤聡一君、黒田収子さん、佐藤稔君、千代裕彦君、松村敏夫君、お元気になられますように。

平成21年のクラス会も同じように「福臨門酒家」で昼食会の予定としました。　（比留間和夫）

昭和30年卒クラス会

あけましておめでとうございます。クラス会のメンバー皆元気です。

会員の喜多代氏は、医療法人を経営し、調剤薬局のチェーンを設立して、クラスの成功者の一人です。彼の音頭で毎年３月に都内のホテルで、同窓会を盛大に行っています。

各メンバーは老いて益々盛んで元気にくらしています。学校もかつての学び屋に新たに最新の学舎が出来て、感激しています。

かつて小生千葉寺の下宿屋におりまして、学校迄30分かけて泥道を下駄で通ったことをなつかしく思い出しています。

私は、小さな検査薬の会社（株）カイノスをたち上げましたが、現下の不況悪戦苦闘しております。

若い後輩の躍進を期待しつつ、最後の老いを何とか無事に乗切って行きたいと念じております。皆様によろしく。　（杉山　　茂）

昭和31年卒業（三一会）

千葉大薬学部卒業後半世紀が経過しましたが、千葉薬の縁はまだ継続しています。今回の「北東北／陸中海岸へのクラス旅行」は、盛岡、三陸、宮古、遠野、花巻と周遊し、「風の又三郎」を思い出す台風の来襲にも負けず、和気あいあいのうちに終了しました。久しぶりにクラス雑誌も発行され、猪鼻の学生生活が思い出されました。最近は、喜寿を意識して年1回のクラス会から、適時年数回の懇親会へと進化しました。また、クラスメンバーのみならず、同窓の方々との年賀状交換も活発に行われています。学部の発展を祈っています。　（星　　昭夫）

「三二会」

恒例のクラス会（三二会）例会は、平成二十年三月

に数寄屋橋ニュー東京ビアレストランで行われ、二十名が参加した。今年も三月二日に、七十才の古希を越えて喜寿に向かう四十三名（卒業時は四十七名）の旧友に会うのが皆の楽しみである。一泊旅行を兼ねた地方例会は平成十九年十月に鳥羽で行われ、伊勢神宮、ミキモト真珠、水族館、志摩の絶景などを楽しんだ。今年は五月に鎌倉が予定されている。一昨年は卒後五十年にあたり、それを記念してクラス会誌ＣＨＡＯＳ（カオス）が復刊された。ほぼ全員が各自の近況や感懐を記した。引き続き昨年は亥鼻（臥豚）時代と同じ自由題材・形式の原稿を募ったところ、三十二名からの寄稿があり、オリジナルのまま一冊のカオスにまとめ、全国の旧友全員が六ヶ月かかって輪読した。これからも例会、地方例会、カオス発刊は続くだろう。

（髙山　浩明）

昭和33年卒業50周年記念会

月日の経つのは早いもので、亥鼻山を下ってから、あっという間の50年だった。５月25日、お茶の水の東京ガーデンパレスで記念会を開催した。卒業生44名、生存者41名中、35名が歩いて出席し、二次会にも32名が参加した。人生50年という事、会社定年55才という事を肌身で感じてきた我々の世代にとって、大学卒業50年記念をこの様に大勢の級友が出席して迎える事が出来たのは、実にすごいと思った。こういうクラスは薬学部の長い歴史の中でも珍しいのではないだろうか？在学中からコンパが好きなクラスだった。卒業後も毎年クラスがあり、出席者も多かった。節目の年には40名近い参加者があった。特に最近、女子は全員出席で、高齢化社会に向けて男女のパワーの差がはっきりしてきている。今後も歩けるうちに、又酒の飲めるうちに級友との交歓を密にしたいと願っている。来年は千葉の鵜原理想郷での一泊旅行を企画している。喜寿から傘寿に向けてのハードルはだんだんと高くなると思うが励ましあって乗り切りたいと願っている。　（上野　幸夫）

昭和34年卒業

昨年11月７、８日、三浦半島のマホロバマインズで１年ぶりのクラス会が開かれました。出席者は21名、すでにリタイアした人が大半で、時間的余裕ができたためかここ数年最大の参加人数でした。宴会後はいつもの通り幹事部屋での懇親会、全員が七十歳を越えましたので、話の中心はやはり健康、病気の話、それにゴルフ、絵画、グルメ、旅行など多分野にわたる趣味の話、それぞれの体験を夜が更けるまで熱心に話し合いました。結論は「クラス会に出席できるだけで幸せ」ということでした。

二日目はクラスメイト五人が運転する車に分乗して城ヶ島めぐり、磯の香がする岩場を散策しました。生憎の小雨でしたが、北原白秋の「♪雨はふるふる城ヶ島の磯に利休鼠の雨がふる♪」の雨と、白秋記念館でたまたまこの色に染めた羽織が展示してあったので、利休鼠を確認できたのは幸運でした。その後観音崎ホテルまで三浦半島の海岸線を快適なドライブ、ここで素晴らしい海の景色を眺めながらの海鮮バイキングは最高でした。今年の卒後五十周年クラス会での再会を約してそれぞれ帰途につきました。　（中嶋　啓介）

平成20年度珊瑚会親睦会について（報告）

昭和35年３月に薬学部を卒業した仲間は41名ですが、すでに故人となった者が７名で住所の不明な方もあり、34名が古稀を迎え、元気に？活躍しております。

今年の珊瑚会（親睦会）は昨年の11月実施のときに決めてあった、５月18日（日）の午後２時から交通の便を考えて、幹事の村田さんと古屋の二人で事前に調査、検討のうえ東京・銀座にある「ざくろ銀座店」の宴会専用の部屋で実施しました。

当初18名の出席申し込みがあり半数以上の出席と喜んでおりましたが、開催直前になって２人の欠席となり、結局16名での開催となりました。

１時30分に受付を始め、２時には予定通りに宴会を始めることが出来ました。着席場所は村田さんがクジを作ってくれたので、公平で良かったと思います。

幹事の古屋が出席を心から感謝し、乾杯の音頭は今成君にやってもらい、和気藹々のうちに進行しました。話題としては家族や同級生などの動向や趣味娯楽さては中国やマヤンマーの自然災害について等幅広くに渡っていたようです。４時過ぎたところで、次の幹事を秦初博君と吉沢花子さんに、来年の予定を５月の第３日曜日の17日に決めてから、部屋を出てロビーで集合写真をとり、流れ解散としました。　（古屋　右内）

36会通信

昨年は５月に東京ガーデンパレスでクラス会を開催し、参加者11名で昼食をとりながらお互いの近況や健康の話等を話し合い、暫く、時の立つのを忘れて話しに花が咲きました。また、秋には11月中旬に有志９名で奈良方面へ「世界遺産等を中心にめぐる２泊３日」の旅行をしました。初日は観光バスにて東大寺、春日大社、興福寺を参拝。２日目はガイド付きマイクロバスをチャーターし、西の京・唐招提寺、薬師寺を参拝。次に斑鳩の里・法隆寺（写真）から大化の改新で有名な談山神社へ。社殿は日光東照宮の造営には手本とされ、関西の日光ともいわれる紅葉の名所。最後に日本最古の寺・飛鳥寺を参拝。最終日は奈良市内の元興寺から昔の町並を残す「なら町」を散策し、帰路に宇治平等院に立ち寄ってから、来年は北陸方面の温泉でゆっくり浸かる旅行を計画しようと申し合わせて、帰途につきました。　（高橋　哲夫）

昭和37年卒業クラス通信

平成20年度のクラス会は10月26日（日）、前年度と同じJR有楽町駅の近くのニュートーキョーLa Stellaでの開催となりました。

出席者は13名と今回は少人数でしたが、話は尽きず楽しいひと時を過しました。現役で仕事を続行中の人、旅行・スポーツその他の趣味に没頭する人、ボランティアで活躍する人など様々ですがお互いの健在を喜び合いました。

昨年11月片岡松寿さんが病気で他界されました。４年前にはクラスメイトだった奥様の登代子さんが逝き、お二人共鬼籍に入ってしまい寂しい限りです。

今年は次回幹事（中山氏＆中島氏）にお任せですが開催会場が変更になるかも知れません。静養中の方は一日も早く健康を回復して、また今回仕事・旅行その他で都合のつかなかった方も次回は是非参加して下さい。

写真は当日撮影したものです。　（池田　守男）

昭和38年卒業（三葉会）

昨年のクラス会は９年振りに東京での開催となりましたので、今も現役のため忙しく宿泊の難しい方々も初日の懇親会には出席されましたので数年振りに旧交を温めあう事ができました（出席26名）。懇親会後19名が宿泊し二次会、翌日は「はとバス」を利用して東京観光の後、翌年の新潟でのクラス会を約して散会しました。水上バスによる隅田川クルーズでの景観、東京タワーからの展望、浅草周辺の変貌振りなど改めて時の流れを感じました。来年には全員が「古希」を迎える年齢になりますし、お互い少しずつあちこち弱り始めて来ましたが、取敢えずは「喜寿」を目指して健康に留意し、「丑」のようにゆっくりと時々休みながらあまり頑張らないで過ごして行ければと思います。残念な事ですが、また一人仲間を喪いました。昨年11月23日に矢田淳代さんが逝去されました。心からご冥福をお祈り致します。　（鷲見　常夫）

昭和39年３月卒業

平成20年は、牧野君、江崎君、沖縄在住の与座さんの御世話で、11月29日（土）、30日（日）の２日間にわたり、沖縄でクラス会を開催致しました。11名が出席し、とても楽しいクラス会でした。立澤君と酒井さんが御家族同伴で、他の出席者は久保、佐藤（敏）、鈴木、横井、渡辺の諸氏と小生でした。一日目はクラスで唯一人早世された渡久地君の御家族と御一緒に渡久地君の墓参りをし、御冥福をお祈り致しました。御家族は御元気に頑張っておられ、家族間の深い絆を感じました。その後、世界文化遺産である識名園と首里城を訪れ、夜はパーティーの席上で学生の頃の話に花を咲かせました。二日目は沖縄美ら海水族館を訪れました。みな沖縄を満喫し、次回の再会を約して散会となりました。次回は東京で、立澤君と鈴木君の御世話でクラス会を行うことになっていますので、皆さん是非参加して下さい。　（五十嵐一衛）

昭和40年卒業（峠の会）

昨年５月31日（土）、恒例のクラス会が品川プリンスホテル・メインタワー38階で開催されました。幹事は荒木・加藤両氏で、出席者は12名（女性７、男性５）。一昨年鎌滝哲也氏が紫綬褒章を受章したので、そのお祝いも兼ねたクラス会となりました。会から“夫婦コーヒーカップ”がプレゼントされましたが、氏の著書「人体実験のススメ～糖尿病予備軍へのメッセージ」（最新医学社）の中に、コーヒー愛飲者は飲まない人に比べて糖尿病発症率がかなり低いという大規模試験の結果が記述されており、予備軍を自認している氏に実証してもらおうと考え当該記念品が選択されたそうです。

さて、今まで「峠の会」は２年毎の開催でしたが、「（高齢者にとって）２年のインターバルは長すぎるので、毎年開催しては」との提案が出され、これに全員賛同。次回幹事に竹山、松田両氏が選出され、本年秋に開催することを確認して散会しました。　（平野　武明）

昭和41年卒業（66会）

平成20年度のクラス会は、『風薫る箱根路をハイキング』というコンセプトを標榜したものの最も心配されたのが天気でした。何故ならば集合日の５月31日は、あいにくの梅雨寒の１日であったためです。

しかし、強羅に泊まった翌日は見事に晴れ渡ったハイキング日和。箱根の山々の稜線がくっきりと見え、芦ノ湖を行く遊覧船のデッキで受ける風もたいへん心地よく感じられました。

何でも幹事の一人が今年の元旦に引き当てたお御籤の「大吉」が功を奏したとか。お陰で総勢18名、天気よし、旅館よし、コースよしの箱根路を満喫できました。

（長岡　静穂、町田　玲子、斉藤　　勲）

昭和42年卒業

平成20年にはクラス員44名のうち十数名が『高齢者』の称号を獲得した。

風の噂によれば大部分の皆さん、功なり名を遂げ、悠々自適の日々を送っているようである。田村君お勤めご苦労さんでした。

さて、ちらほら風の吹くまま流れ着く落葉情報によれば「病院通い」が常態となっている人も多いようである。（私もその一人でーす。）是非是非ご自愛を。

次回クラス会の予定は未定ですが『健康第一』で会いたいものです。

良い場所があればお知らせ願う。

いにしえに　千葉の都に　咲きし華
　華麗なしとも　健やかに会はむ（字余り）

（齊藤　　弘）

昭和46年３月卒業

10月５日、４年に一度の同期会が47名もの出席にて盛大に開かれました。まだまだ現役活躍中の方もいますが、還暦を迎える年に当たり、合唱、社交ダンスまたまた地域の役員を引き受けるなど第２の人生を楽しく過ごしているとの話題にも花が咲きました。

昭和51年卒業

平成20年にはクラス会がなかったのですが、お変わりありませんか？　世の中の健康志向の波に乗って、日々メタボ対策に余念がない方も多いのでは・・・。

さて最近よく耳にする「登録販売者」ですが、今年の６月から店頭でお目にかかれるようです。この資格では一般用医薬品の中で人体に対して比較的リスクが低い医薬品を取扱うことができます。薬学部を卒業しなくても「登録販売者」になれるので、薬剤師になるためにわざわざ６年制の薬学部に行かなくても、と思っている受験生もいるようです。しかし医薬品の生産高から見ると「一般用医薬品」10％に対して「医療用医薬品」が90％を占めていますので、登録販売者制度が施行されても薬剤師の必要性が変わるものではなく、むしろ薬剤師の有する高度の専門性やスキルがますます必要とされてくるのではないでしょうか。

６年制を含め薬学部を取り巻く状況は刻々と変化しています。今年はクラス会開催が予定されていますので、皆様から現場の話をいろいろお聞きしたいものです。

（渡辺　敏子）

昭和55年卒業

友達の輪を今年も中断して、最近の千葉大学の教育について紹介します。私は昨年の10月に千葉大病院のリハビリテーション部から総合医療教育研修センターに異動しました。そこでの仕事は、ひと言で言えば医学教育にかかわるすべてのことをするというものです。たとえば１－６年生の医学部教育や卒後研修医などの教育プログラムの作成や評価を行ったり、指導医の指導力アップのための教育講座をやったり、学生に対してはコミュニケーションやチーム医療の授業をしたりします。私たちが学生の頃は授業と言えば講義ばかりだったような気がしますが、最近はグループワークで積極的に発言や発表をさせたり、模擬患者にインタビューをするなどの演習や実技の授業が多くなり、教える方も気合いがいります。その中で興味深いものは、昨年の猪之鼻奨学会報でＳ63卒の石井伊都子先生が紹介されていた専門職連携教育です。医療技術も高度になり、社会サービスなどの仕組みも複雑になっていく中での医療・ケアにはさまざまな職種の連携が欠かせないものになっていますが、現実には必ずしもうまくいっていないのが現状です。そこで、学生のうちから多職種が合同で連携を重視した授業を行っていって、現場に出たときの連携をスムーズにおこなえるようにしようという目的でイギリスで始められました。千葉大学ではおととしから看護学部・医学部・薬学部が合同で１年生から一緒に患者さんの話を聞いたり、医療機関などの見学に行くなどの授業を始めました。各学年で内容がステップアップし、今年度は３年生までプログラムがあります。薬学部では石井先生、医学部では私が担当しています。私たちが学生の頃にはなかった授業なのでこれからが楽しみです。　（朝比奈真由美）

昭和61年学卒

“Ｏ君、現る！”

ここ数年、何人かの同級生と新年会、暑気払いなどと称した飲み会を開いています。だいたいは決まったメンバーですが、時々、スペシャルゲストも現れます。今年の新年会の前にここ20年近く消息不明のヒゲのＯ君の実家に誘いの葉書を出してみたところ、思いもよらず彼から返事が来て、頭と腹に年相応の貫禄がついた相変わらずヒゲの彼と久しぶりに一杯やる事ができました。また、同級生達が大学教授、神主、ミュージシャン、生体治療師、弁理士など薬学分野にとどまらず、多彩な職業についていることもわかりました。その他の同級生も仕事だけでなく、子供の進学、親の介護などの悩みを抱えつつも社会においてはそれなりの存在になっているようです。みんなで会っている間だけは学生の頃に戻れます。次回の飲み会は未定ですが、ちょっと気分転換がてら参加してみたい方は以下のアドレスにご連絡をいただければと思います。

akentaro@mail.ecc.u-tokyo.ac.jp　　（安東賢太郎）

平成５年３月卒業

早いもので卒後15年がたち、身も心も？すっかり脂ののり切った世代となった我々ですが、同期数名＋α の小さな飲み会での一言がきっかけとなり、実に十数年ぶりの同窓会開催のはこびとなりました。この日の為に？はるばるアメリカから帰国した宮崎君をはじめ、全国各地から約40名の同期が集い、楽しい一時を過ごしました。ビンゴ大会では半農半薬剤師のスローライフを実践する白倉君の丹精こめられた新鮮な野菜のプレゼントあり、貴重な休日を費し作られた大原さんの大学周辺近況レポートありと、大盛況のうちに同窓会はお開きとなりました。今回の同窓会開催の為に一肌ぬいでくれた幹事の市村さん、大原さん、熊沢さん、藤沢君にこの場を借りて感謝致します。次回は卒後20年の節目の年となります。多数の同期生の参加を、次回幹事として心よりお待ち致しております。

（藤田陽一郎）

支部だより

◉東京支部

今年は総会を開催する年に当っています。秋11月に行う予定です。多くの同窓生の参加を期待しております。

現在、支部の薬友会の集まりは低調で、特に若い同窓生の参加が少ないので、何とか参加を推進する手立てはないかと、昨年から「薬友会発展プロジェクト08（仮称）」設立して５年を目処に検討しております。先づ、今年の総会には、今年度卒業する学生を10名程度ご招待して、学生さんと懇親するなどして、方向性を見出して、今後の薬友会発展の糸口を探って見たいと思っている次第です。薬友会活性化について、ご意見を東京支部までお寄せください。　（渡辺　楷）

ゐのはな山岳会

今、私の手元にある「ゐのはな山岳会会報四十周年記念誌」を見ると、昭和34年（1959年）６月に第一回の山行として「川苔山」が記録に残っています。以来、輝かしい実績を残して、ついに本年（2009年）「ゐのはな山岳会」は五十周年を迎えたことになります。

「40周年記念誌」を発案し、編集に尽力された、今は亡き吉田先生、「山行記録一覧表」の中で、メンバー全員が五十周年はもとより「会」の還暦（60周年）を迎えるのが目標と書いていた和田君、いつも笑顔で、がっしり道を進めて山を行く牛山先輩、懐しく、忘れられない方々。

こんなにも長い歴史を刻む事になるとは、正直、思いませんでした。

毎月一回のペースで、山行を守って、歳の初めに、行く先が大体決まります。

毎月の山行の間には、有志で海外の山登りやトレッキング、又国内でも、チョット遠い所へも出かけます。

日本に駒ヶ岳と名のつく山が十七くらいあるそうで、会の目標として全て登りたいと言う計画があります。（これが仲々、手強い山が多くて、昔の人々が踏み固めた道も、歩るく人が少なくなっていて、整備不全になっていると頂上に辿り着くのが大変なんです）

平成二十年では、ハイライトは何んと言っても、雨飾山（10月18日）でした。

素晴しい快晴に恵まれ、時を得た紅葉と、頂上からの360度の眺望、さすが百名山と言われた登りがいのある名山でした。

最近は登るだけではなく、途中に出会う、可憐な草や花や樹木の観察、川のせせらぎの音、鳥の声に耳を傾けて、自然を享受する歩るき方になって来ています。

さて、これからも、足腰を丈夫にして安全で、ゆったりした楽しい山歩きをしたいものです。少々具合が悪い所があっても、身体と云うものは「使いながら治しちゃえ！」って言う気持で、一人一人が精神と肉体のバランスをとりながら、円熟味を増しつつ、歩るく事を楽しんでいます。　（岡崎美沙子）

亥鼻会

亥鼻会は昭和15年卒の故　岩城謙太郎様が旧千葉医科大学付属薬学専門部の卒業生で日本橋本町に関係の有る有志の皆様に呼びかけて、毎年２回会合を開こうとの事から始まり、第１回を始めてより昨年で16年となりました。

昨年も恒例により春秋の２回会合をひらきました。

何分にも会員の皆様は高齢でして、段段出席者が少なくなりましたが、昭和15年卒の皆様をトップに26年卒の方々に出席を頂いております。

第31回で４月16日（水）講師は昭和51年卒の山本芳邦様にお願いして「香りの迷宮を尋ねて」の題で講演をいただきました。出席者13名

第32回は薬祖神社祭礼のお祝いの日の平成20年10月17日（金）に「薬と俳句と話し方」の題で昭和16卒の安田英夫様に講演をいただきました。出席者13名

（幹事　昭和23年卒　井上　富夫）

サークル紹介

千葉大学薬友会ゴルフ

平成16年春に発足した薬友会ゴルフもお蔭様で満５才になり、順調に回を重ね第９回を20.７.18（４月の予定が天候不良により延期）に、第10回記念大会を20.10.３に開催し楽しく上下の懇親を図った。現在30名近くまで会員数は増えて来たが、これは幹事の原口氏（Ｓ38卒）の努力に負うところが多い。現在彼は療養中ですが、元気になってヘアウェイに戻って来てほしい。今回初参加の勝浦公男氏（Ｓ44卒）は３位に入賞。次回は更に若手の鈴木達夫氏（Ｓ53卒）が参加予定。

『20年の成績』第９回①池田　②村瀬　③三浦（尚）
第10回①平野　②横田　③勝浦

『21年の予定』第11回　21.４.17(金)
第12回　21.10.９(金) 於 磯子C.C.

皆さん奮ってご参加下さい。

『連絡先』三浦　清　電話045-832-5714
勝浦公男　電話03-3565-3428

※ビッグニュース　池田守男氏（Ｓ37卒）の快挙
Age-shoot達成！
20.６.２　市原G.C.市原コース（Par72）68ストロークでラウンド　お見事の一語です。

写真は第10回参加者　（三浦　清）

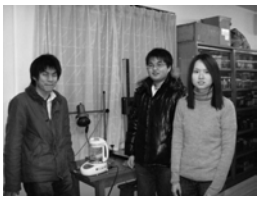
東洋医学研究会

私たち東洋医学研究会は薬学部のサークルとして生薬、漢方の勉強をしています。

主な活動としては、顧問の先生に生薬や、漢方の講義をして頂いたり、実際に漢方を作ってみて自分たちで飲んでみたりしています。授業で習う以上のことを教えて頂き、大変勉強になります。また、11月の大学祭では、生薬の展示や漢方の紹介をしており、学外からの一般のお客様方との交流の機会となっています。また、医学部にも東洋医学研究会があり、そちらの講義を受けることもできます。

部員は薬学部の学生のみで少数ですが、その分、先輩、後輩との交流もしやすく、薬学部特有の相談や話などを気軽にすることができ、先輩、後輩と仲良くなりやすいと思います。活動自体はそれほど頻繁に行っているわけではありませんが、その分、1回1回を集中して行えていると思います。また、講義で取り扱っている生薬や漢方も基本的でよく扱われているものが中心であり、薬学部生としてぜひ知っておきたいものであるので、とても勉強になっています。

（薬学部３年生　内山　健人）



＜煎じ薬の作製風景＞
この日は、柴胡剤について勉強した後、小柴胡湯（右）を煎じて飲んでみた。

学部だより

薬剤師国家試験合格状況（２年連続国公立１位）

今年の第94回国家試験では、新卒者合格率89.87％（79名受験71名合格、国公立１位、全国19位）の成績であり、昨年に引き続き２年連続して新卒者は国公立17大学中１位の合格率を維持しています。今回は、旧制度の４年制現役卒業生最後の薬剤師国家試験であり、今年の好成績は今後３年間の千葉大学薬学部受験生に大きなインパクトを与えるものと思われます。

（上野　光一）

受　　賞

学　会　賞

平成20年５月20日　日本薬剤学会奨励賞（日本薬剤学会）　森部久仁一（製剤工学）
平成20年10月31日　平成20年度日本薬物動態学会奨励賞（日本薬物動態学会）　設楽悦久（生物薬剤学）
平成20年10月31日　平成20年度日本薬物動態学会奨励賞（日本薬物動態学会）　小林カオル（薬物学）

論 文 賞 等

平成20年５月10日　第55回有機合成化学協会関東支部・野田シンポジウム優秀講演賞（有機合成化学協会関東支部）　林　迪乃（薬品合成化学）

平成20年９月６日　日本レトロウイルス研究会夏期セミナー 2008 Best Presentation Award（日本レトロウイルス研究会）　藤　秀義（薬品物理化学）

平成20年９月10日　第25回有機合成化学セミナー優秀ポスター賞（有機合成化学協会九州山口支部）　小池由佳（薬品合成化学）

平成20年10月４日　第52回日本薬学会関東支部大会優秀研究発表者賞（日本薬学会関東支部）　高橋明格（分子細胞生物学）

平成21年１月29日　第22回内藤コンファレンスポスター賞　荒井　緑（活性構造化学）

学　内　賞

平成20年10月16日　千葉大学オープンリサーチ2008学長賞優秀賞（千葉大学）　戸井田敏彦（生体分析化学）

平成20年12月15日　なのはなコンペ2009（千葉大学）　荒井　緑（活性構造化学）

＜薬学関係者の受賞＞

平成20年10月31日　平成20年度日本薬物動態学会学会賞（日本薬物動態学会）　北田光一（千葉大学医学部附属病院薬剤部）

2008年度　博士学位授与一覧

課程博士（甲号）

氏　名	学位の種類	論　文　題　目	授与年月日
鈴木　圭介	博士（薬学）	大環状ポリアミンを母体とする99mTc放射性薬剤の新規開発に関する基礎的研究	平成20年9月30日
間下　雅士	博士（薬学）	Activation mechanism of cytosolic phospholipase A2α in neuronal cells; regulation of AMPA receptor expression in cerebellar Purkinje neurons.（神経系における細胞質型ホスホリパーゼA2αの活性化メカニズムとその役割）	平成20年9月30日
韓　　霞	博士（医薬学）	Studies on the structure and functions of the regulatory domain of the N-methyl-D-aspartate receptor（NMDA受容体の調節領域の構造と機能の解析）	平成21年3月25日
宮﨑　　工	博士（医薬学）	次世代薬剤管理指導支援システムの構築と活用に関する研究－テーラーメイド薬剤情報提供システムの開発と臨床応用－	平成21年3月25日
池田喜久子	博士（医薬学）	Src型チロシンキナーゼLynの細胞内オルガネラ選別機構に関する研究	平成21年3月25日
宮山　貴光	博士（医薬学）	細胞内における銅制御因子のクロストーク機構の解明	平成21年3月25日
鈴木　聡子	博士（医薬学）	医薬品情報データベースの統合的活用に関する研究＝処方支援システムの開発及びその臨床使用＝	平成21年3月25日
渡邊　伸一	博士（医薬学）	薬物相互作用検索システムの開発と活用に関する研究	平成21年3月25日
畢　　洪凱	博士（医薬学）	Roles of HU and IHF in growth and survival at acidic pH in *Escherichia coli*	平成21年3月25日
奥村　　亮	博士（薬学）	キノロン系抗菌薬の耐性肺炎球菌出現抑制効果ならびに殺菌力発現機構に関する研究	平成21年3月25日
吳　　煜秋	博士（薬学）	Study on Novel Bioactive Alkaloids in Botanic Medicinal Resources Indigenous to Yunnan Province in China　中国雲南省産薬用植物資源含有新規生物活性アルカロイドの探索研究	平成21年3月25日
鹿毛　宏一	博士（薬学）	Salmonella Pathogenicity Island 1並びにべん毛レギュロン発現の共役制御	平成21年3月25日
菊地　博之	博士（薬学）	デスレセプター誘導作用を指標とした天然物の探索研究	平成21年3月25日
金　　龍	博士（薬学）	ジアミノホスフィンオキシド類縁体を不斉配位子とする遷移金属触媒を利用した不斉反応の開発と応用	平成21年3月25日
高品　智記	博士（薬学）	標的細胞の選択的除去に向けたFADD改変蛋白質によるアポトーシス誘導活性増強系の開発	平成21年3月25日
鳥居塚洋輔	博士（薬学）	ヒガンバナ科植物含有Lycorine型アルカロイドに関する化学的研究	平成21年3月25日
西川　泰弘	博士（薬学）	ヒカゲノカズラ科植物含有Lycopodium Alkaloid類の不斉全合成研究	平成21年3月25日
藤　　秀義	博士（薬学）	タンパク質立体構造情報に基づく*in silico*創薬支援ソフトウェアの開発と応用研究	平成21年3月25日
松井　真理	博士（薬学）	DnaKシャペロンによる*Salmonella* Type Ⅲ分泌システム制御機構に関する研究	平成21年3月25日
丸山　　潤	博士（薬学）	*Kopsia lapidilecta* アルカロイド Lapidilectam の合成研究（コプシア ラピディレクタ アルカロイド　ラピディレクタムの合成研究）	平成21年3月25日

氏　名	学位の種類	論　文　題　目	授与年月日
三井田宏明	博士（薬学）	安全性評価向上のための生理的条件を考慮したトキシコキネティクスの応用に関する研究	平成21年3月25日
宮嶋　篤志	博士（薬学）	DNAメチル化による薬物動態関連遺伝子発現制御に関する研究	平成21年3月25日
山村　尚弘	博士（薬学）	外部滑沢法による主薬の安定化及び滑沢剤分布の評価に関する研究	平成21年3月25日
横山　栄二	博士（薬学）	*Salmonella enterica* serovar Typhimurium DT104の分子疫学的研究	平成21年3月25日
李　暁帆	博士（薬学）	Wntシグナル阻害作用をもつ天然物の探索	平成21年3月25日
渡邊　大輔	博士（薬学）	病原性微生物が産出する新規環状ポリペプチド M10709 に関する研究 および 熱帯原産植物からの膵リパーゼ阻害活性成分の探索研究	平成21年3月25日
Bunyapa Wangwattana	博士（薬学）	Functional analysis of genes involved in anthocyanin accumulation in *Arabidopsis thaliana* （シロイヌナズナにおけるアントシアニン蓄積に関する遺伝子の機能解析）	平成21年3月25日

論文博士（乙号）

氏　名	学位の種類	論　文　題　目	授与年月日
富田　貴之	博士（薬学）	慢性大腸炎発症及び維持のメカニズムの解明に関する研究	平成20年9月30日
田中　道明	博士（薬学）	変形性関節症における関節破壊機序の研究	平成20年9月30日
小野間美都	博士（薬学）	新規非ペプチド性モチリンレセプターアゴニストmitemcinal(GM-611)の胃排出促進作用に関する薬理学的研究	平成20年9月30日
小暮　紀行	博士（薬学）	*Gelsemium*属植物含有生物活性アルカロイドの探索と合成に関する研究	平成20年9月30日
伊藤　誠	博士（薬学）	非アルコール性脂肪性肝炎モデルマウスの開発とメラニン凝縮ホルモン１レセプターの阻害による治療効果の評価	平成21年3月25日
木村　泰治	博士（薬学）	ラット勃起反応における5-HT2C受容体の役割に関する薬理学的研究	平成21年3月25日
大山　清	博士（薬学）	植物トリテルペンの生合成研究：分子遺伝学的研究資源を活用した有機化学的解析	平成21年3月25日
佐藤　慶治	博士（薬学）	計算生物化学による古細菌ロドプシンファミリーの光受容システムの解明	平成21年3月25日

教員の異動（2008. 5. 1～2009. 4. 30）

H20. 9. 30
　中村　智徳（講師）退職
　（高齢者薬剤学→群馬大学大学院医学系研究科准教授）
　草間　美嘉（特任研究員）任期満了退職
　（大学院教育改革支援プログラム）

H20. 10. 1
　小林江梨子（助教）採用（医薬品情報学）
　黒川　達夫（特任教授）採用
　（厚生労働省→大学院教育改革支援プログラム）

H20. 11. 30
　鈴木　紀行（助教）退職（分子画像薬品学）

H20. 12. 1
　鈴木　紀行（特任准教授）採用
　（優れた若手研究型教員の人材育成システム）

H21. 1. 1
　山浦　克典（講師）採用（高齢者薬剤学）

H21. 2. 28
　大槻　崇（助教）退職
　（活性構造化学→国立医薬品食品衛生研究所研究員）

H21. 3. 31
　牧野　一石（准教授）退職
　（薬化学→北里大学薬学部教授）
　小椋　康光（准教授）退職
　（生体分析化学→昭和薬科大学薬学部教授）
　大矢　麻衣（助教）退職（微生物薬品化学）

H21. 4. 1
　関根　祐子（教授）採用
　（東京大学医学部附属病院薬剤部→実務薬学）
　阿南弥寿美（助教）採用（衛生化学）
　増田　和司（助教）配置換
　（医学部附属病院薬剤部→臨床教育）
　佐藤　慶治（助教）採用
　（産業技術総合研究所→微生物薬品化学）
　平良優一郎（助教）採用（分子画像薬品学）

H21. 4. 30
　中西　和嘉（助教）退職
　（薬品製造学→東北大学大学院理学研究科講師）

2008年度　卒業生・修了生の進路

学部卒業　78名：進学65名（千葉大学62名、他大学３名）、病院・薬局・公務員等10名（山王病院、総泉病院、国立がんセンター東病院、沖縄県立南部医療センター、くすりの福太郎、総合メディカル、日本生科学研究所、

日本調剤、日本メディカルシステム、神奈川県警科学捜査研究所)、企業2名（ナリス化粧品、武田薬品工業)、その他１名

修士修了　89名：進学12名（千葉大学10名、他大学２名)、病院・薬局・公務員18名（日立総合病院、聖マリアンナ医科大学病院、船橋総合病院、昭和大学病院、東邦大学医療センター佐倉病院東京足立病院、岩手医科大学附属病院、戸田中央総合病院、東京慈恵会医科大学、日本調剤、(株）マエノ薬局)、企業52名（味の素、アステラス製薬、アリスタライフサイエンス、イーピーミント、エーザイ、エス・ディー・エスバイオテック、大塚製薬、小野薬品工業、科研製薬、杏林製薬、協和発酵キリン、クインタイルズトランスナショナル・ジャパン、クレハ、広栄化学工業、サンメディック、塩野義製薬、第一三共、大正製薬、大日本住友製薬、大鵬薬品工業、高田製薬、武田薬品工業、中外製薬、ディーエイチシー、テルモ、トーアエイヨー、富山化学工業、日本新薬、日本ケミファ、日本ミルクコミュニティ、久光製薬、ブリストルマイヤーズ、メディサイエンスプランニング、持田製薬、森永製薬、理研香料工業など)、その他７名（医薬品医療機器総合機構、阪大微生物病研究会など)

博士修了　23名：医薬品医療機器総合機構、国立医薬品食品衛生研究所、国立感染症研究所、富山大学和漢医薬学総合研究所アステラス製薬、佐藤製薬、スタッフジャパン、第一三共、データインデックス、東京化学同人、フコク、龍健信など。

2009年度　薬学部・大学院医学薬学府入学者

学部入学　81名：(男43名、女38名)：推薦10名、前期61名、後期９名、帰国子女名、国費外国人１名（出身県別：北海道１名、福島１名、茨城８名、栃木２名、埼玉10名、千葉12名、東京26名、神奈川９名、富山１名、福井１名、山梨１名、長野３名、愛知１名、愛媛１名、福岡１名、鹿児島１名、沖縄１名、フィリピン１名)

修士入学　83名：総合薬品科学専攻63名、医療薬学専攻20名

博士（薬学領域）入学　17名：創薬生命科学専攻12名、環境健康科学専攻１名、先進医療科学専攻２名、先端生命科学専攻２名

薬友会より

薬友会のホームページURLです。随時更新しております。ぜひご覧ください。

http://www.p.chiba-u.ac.jp/yakuyukai.html

平成21－22年　主な活動予定

21年５月　会報19号発行
　　７月　生涯教育セミナー
　　12月　役員会・常任理事会
22年５月　会報20号発行
　　７月　役員会・総会および生涯教育セミナー
　　12月　役員会・常任理事会

平成20年度　活動報告

３月　新入生入会案内（新規終身会員110名)
５月　会報18号発行
７月　第17回千葉大学薬友会生涯教育セミナー（宮木高明セミナー）開催（千葉大学けやき会館）
「感染症との闘い続く」
（講師４名，参加者350名)
12月　役員会・常任理事会

お知らせ

本会活動のますますの活性化のため、会員の皆様に終身会員へのご加入とご寄付をお願いしております。

１）終身会員：会費2万円、昭和48年に開設（現在約50％加入）会員名簿を更新のたびに無料にて配布致します。
２）寄付：一口２千円から受け付けております。特に終身会員会費が１万円であった会員の皆様のご協力をお願い申し上げます。
３）会報、名簿等への広告掲載をご希望の方は薬友会までご連絡をお願い申し上げます。

上記いずれのお申し込みも＜郵便振替口座0015-5-551796千葉大学薬友会＞にお願い申し上げます。

各種委員会名簿

総務委員会　○戸井田敏彦、西村和洋、細山沙織、村上泰興（S36)、荒野　泰（前委員長：アドバイザー)
財務委員会　○熊本卓哉、石川　勉、村上泰興（S36)、山崎真巳（前委員長：アドバイザー)
名簿委員会　○荒野　泰、上原知也、村上泰興（S36)、根矢三郎（前委員長：アドバイザー)
事業委員会　○斉藤和季、山崎真巳、吉本尚子、大川幸子（S32)、小川通孝（S34)、　山本友子（前委員長：アドバイザー)
会報委員会　○小林　弘、斎藤浩美、深町利彦、斉藤和季、山崎真巳、吉本尚子、小川通孝（S34)、加藤文男（S47)、角田範子（S52)、石橋正己（前委員長：アドバイザー)

（○印；委員長)

千葉大学SEEDS基金について

このたび千葉大学SEEDS基金が創設されました。本基金（＝無限の生命力を象徴する種子）はチャレンジを支え、人を育てる基金として、優秀な学生への教育・研究生活にかかわる経済的支援などに活用されます。皆様からのあたたかいご支援をお待ちしています。詳しくはホームページ（http://kikin-chiba-u.jp/）をご覧ください。

第18回　千葉大学大学院薬学研究院・薬友会　生涯教育セミナー・(宮木高明記念講演)開催のお知らせ

日　時：2009年７月４日（土）　13：00～17：20
場　所：千葉大学けやき会館　大ホール
主　催：千葉大学大学院薬学研究院・千葉大学薬友会
共　催：日本薬剤師研修センター
後　援：猪之鼻奨学会
テーマ：**「植物からのくすり　－漢方・生薬の最先端－」**

「最近の漢方・生薬の話題：漢方薬のユニークな作用」
鳥居塚和生　先生（昭和大学薬学部　教授）

「和漢薬の標準化と日本薬局方」
合田　幸広　先生（国立医薬品食品衛生研究所　生薬部長）

「薬用植物成分の生合成」
海老塚　豊　先生（東京大学大学院薬学系研究科　名誉教授）

宮木高明記念講演「和漢診療の実際」
寺澤　捷年（千葉大学大学院医学研究院　教授）

懇親会：17：30～　けやき会館　レストラン　コルザ

千葉大学校友会総会のご案内
平成21年度校友会総会は平成21年11月７日（土）、けやき会館で開催されます。開催時間等の詳細は千葉大学ホームページに掲載予定です。

セミナー参加費　1,500円（事前予約）2,000円（当日）
懇親会参加費　2,500円（事前予約）3,000円（当日）
参加申込み方法　下記の郵便振替口座に参加費をご送金ください。払込書の通信欄に、氏名、住所、卒業年を必ずご記入ください。［事前予約締切：平成21年６月19日（金）］
郵便振替口座：00150－5－551796　千葉大学薬友会

本セミナーに関するお問い合わせは薬学研究院（遺伝子資源応用研究室）山崎真巳までお願いいたします。
（電話・FAX：043-290-2905　E-mail: mamiy@faculty.chiba-u.jp）

※生涯セミナーへのご招待：本年度は薬学部卒業後35年の1974年（昭和49年）３月、卒業後45年の1964年（昭和39年）３月に卒業された方々をご招待いたします。該当される方は当日受付にお申し出ください。

編集後記

薬友会報も19号となり、新しい企画をとのご意見が薬友会員から寄せられました。近年薬学部卒業生が活躍する場は大幅に広がりを見せており、様々な分野で活躍している比較的若い卒業生からの寄稿を掲載することも、１つのアイデアと考えました。平成19年度から大学院GP「世界規模の治験・臨床研究を担う医療人育成」が採択されたこともあり、本号では、「医薬品の承認申請業務」に携わっている卒業生から寄稿していただきました。今後、皆様のご批判を頂きながら、少しずつ新たな企画を組み入れられればと考えています。

（小林　弘）

19号会報編集委員
小林　弘（委員長）、斎藤浩美、深町利彦、斉藤和季、山崎真巳、吉本尚子、小川通孝（S34）、加藤文男（S47）、角田範子（S52）、石橋正己（前委員長：アドバイザー）